

2006年冬、出張中の帯広のホテル。深夜、つけっ放しのTVに目を覚まされた。チェン・ミンの話だった(NHK「食彩浪漫」)。「舷外に学ぶ」という言葉が心に残った…

究めるつもりでロウイングだけに没頭しすぎると、自分勝手な思い込み、自己満足の世界に終わる。自分のこだわりでこだわりすぎると、結局自分を伸ばせない、ということでもある。

## 1 舷外に学ぶ

## Learning at the out of Strings

チェン・ミンは1968年、音楽家の父と女優の母の間に生まれ、幼少から父に二胡を教わる。上海戯曲学校で二胡を専攻、上海越劇院オーケストラでメイン二胡奏者となり、演劇も学びTVドラマに出たこともある。1991年来日、93年から共立女子大学で日本文化を専攻。全国公演や他の音楽との協演など幅広い演奏活動、二胡ブームの火付け役でもある(関係資料より)。

番組の中で語られた、父に教わった「求之弦中、得之舷外」という言葉。「二胡を追求するには、音楽だけでなく『弦の外』、広い外の世界から学ぶことが大切」といった意味だ。

以下、TOKYO 人権 No.17(1999.3.4/東京都人権啓発センター、ウェブ、2014.4.29 確認)から引用(要約、一部編集)。

### Q 来日してから何が一番、影響を与えましたか？

「二胡にまったく触れなかった2年間ですね。日本語学校に通っていた時期。でも、そのおかげでもう一度自分を客観的に見つめ直すことができました。小さい頃から、音楽のある環境で育ち、父が師匠でしたから、特にこちらからお願いしなくても教えてくれたのです。ところが、当時はそんな恵まれた環境を、あまり意識できていませんでした。それが日本に来て一転、やりたくてもできない環境になってしまった。そればかりか、やりたいという余裕すらなくなってしまったんです。その時になって、初めて自分から二胡を弾きたいと強く願うようになりました。そこからいろんなチャンスが増えていって、ようやく心をゼロの状態に戻して再出発することができました。」

### Q 演奏する時に心がけているのはどんなこと？

「ただ奏でるだけでなく、そのなかから何を伝えたいのか、を大切にしています。綺麗な音色や美しい旋律といった技術的なことは、もちろん必要です。でも、感動してもらえるような演奏をするためには、それだけでは足りません。技術的な面をしつかりと身に付けた上で、自分の心をいかにして曲に込めていくことができるか。そこが大事なんだと思っています。」

楽器を弾いているということのを忘れ、自分と楽器が一体になっているという感触を得られる時があります。そういう瞬間は本当に幸せな気分になれるし、自分でも「ああ、今日の演奏は素晴らしかったな」って思えるんです。もちろん、いつもそんな最高の状態を保つことはできません。そもそも、同じ音というのは二度と出せないものですから。その日の状態によって必ず音は変わります。楽器の状態や手の状態、心の状態も影響します。そうやって日々、音は変化していきます。

だとしたら、私はいつも良い方向へ変わっていきたいですね。そのためには、もちろん練習を重ねていかなければいけません。が、それよりも二胡から離れたところで得られる経験のほうが大事です。様々な経験を積み心が豊かになれば、自然と二胡の音色も豊かになっていくものです。以前、父が教えてくれた「求之弦内 得之舷外」という言葉は、まさにこのことを言い表しています。この言葉、私の二胡にも彫ってあるんですよ。だから、この二胡で演奏するたびに「いつも“よい変化”を求めて頑張ろう」と、前向きな気持ちになります。それに、父と一緒に演奏しているような気にもさせてくれるんです。」



チェン・ミン (公式ウェブサイトより)

「得之舷外」の語源を追った。「徐上瀛」(XU Shangying, 1582 - 1662)という明代の文人の著「溪山琴况」(1641)に辿りつく。古琴についての芸術論で、その中の「遠」(遠)の一節に、その言葉がある:

遠与迟似、而实与迟异、迟以气用、远以神行。故气有候、而神无候。会远于候之中、则气为之使。达远于候之外、则神为之君。至于神游气化、而意之所之玄而又玄。时为岑寂也、若游峨眉之雪。时为流逝也、若在洞庭之波。倏缓倏速、莫不有远之微致。盖音至于远、境入希夷、非知音未易知、而中独有悠悠不已之志。吾故曰“求之弦中如不足、得之舷外则有余也。”

最後の下線部、「弦の中だけに求めても足らず、弦の外に求めてようやく足りる」といった意味だそうだ。(漢字だが全く読めない。「漢文」の授業をちゃんと聴いておけばよかった。)

## 2 「得之舷外」

## Learn Rowing from out of Gunwale

蛇足は無用。ロウイングへの集中、道を究めるつもりでそこにだけ没頭することは、同時にロウイングを狭く自分勝手な思い込みの世界に閉じ込める危険がある。他のスポーツ、文化…だけでなく、社会や家庭とのかかわりの中で、体験や心を豊かにすることが、遠回りに見えても結局、より深いロウイングの深淵へと接近するための糧となる。というより、ロウイングというカテゴリーに縛られるのでない深さと価値につながる、と。

蛇足: とはいえ最近、いや昔から? そこまで集中する選手自体、それほど多くないかも。今では絶滅危惧種か?

蛇足の蛇足: 2014年春の深夜、雨。つけっ放しのTV(またかw)、録画した「舟を編む」(辞書編集の人の物語)が流れていた。先日はNHKで「辞書を編む」もやっていた。漕艇譜のこと重ねてみる。移り変わる言葉のなかでも十年以上もかけて完璧を目指す辞書作りの校正との対比。半面、ウェブを利用しての補完的連携。漕艇譜4をどうしようかと考えつつ。そしてふと、なぜかこのページを思い出した。漕艇譜Ⅲ(RM 2009)では、「得之舷外」と書いていたが、弦⇒櫂(オール)と書き換えるよりも、弦⇒舷と、韻をなぞったほうがいいなと。(単に駄洒落に流れたともいえるがw)

また現在、仕事自身もロウイングにシフトしたが、その中で造船のスタッフのクラフツマンシップに重ねて感じるところもある。そこはまた別のところで述べたい。